

## 夕暮不動明王について

関市の「ふどうの森」の「昆虫の森」の東屋付近に夕暮不動明王があります。



夕暮不動明王石碑



夕暮不動明王の鳥居

夕暮不動明王と刻まれた石碑があり、その奥に鳥居があります。迫間不動尊と同様に神仏習合時代の名残が伺えます。この地は、今の多賀坂林道がなかった頃の参道でもあり、峠を越える古道であったと思われる、迫間不動尊(明治初期までは迫間山 岩屋不動明王)の「奥の院」へ向かう道と多賀坂峠から「奥の院」に向かう分岐の手前に、この夕暮不動明王が位置しています。(末尾の地図参照)



鳥居、制吒迦童子、矜羯羅童子の石碑



石灯笼と弘法大師像



弘法大師像

石灯笼の前には石碑(左上写真)があり向かって左が鳥居、中央に制吒迦童子(せいいたかどうじ)、向かって右に矜羯羅童子(こんがらどうじ)と刻まれています。本来の配置としては中央に不動明王、向かって左に制吒迦童子、向かって右に矜羯羅童子が配置するとされます。この石碑に鳥居が刻まれていることから、寄進した記録として刻まれた石碑と考えられ、夕暮の起源は矜羯羅童子と制吒迦童子が関わっている可能性が有ります。

ここには不動明王と制吒迦童子と矜羯羅童子の3体は無く、迫間不動尊に移された可能性が高く、先に童子2体に移され代わりに石碑が寄進され後に不動明王が移されたのかもしれませんが。その後、童子の代わりとして石灯笼が寄進されたと思われます。また、夕暮不動明王の名前は全国には知る限り、迫間だけにあり、調べると不動明王の脇侍(きょうじ)である制吒迦童子は業波羅蜜とされ、大日如来を北側からサポートする菩薩を受け継ぐ童子とされ、矜羯羅童子は法波羅蜜とされ、大日如来を西側からサポートする菩薩を受けつぐ童子とされており、2体の童子が北と西を守る意味があり、本尊である迫間不動尊の不動明王(大日如来の化身)を中心として日が沈む西方と北方を守る意味で分岐近くに制吒迦童子と矜羯羅童子が見張り役として置かれ、夕暮不動明王と名付けられたのではないかと推測します。

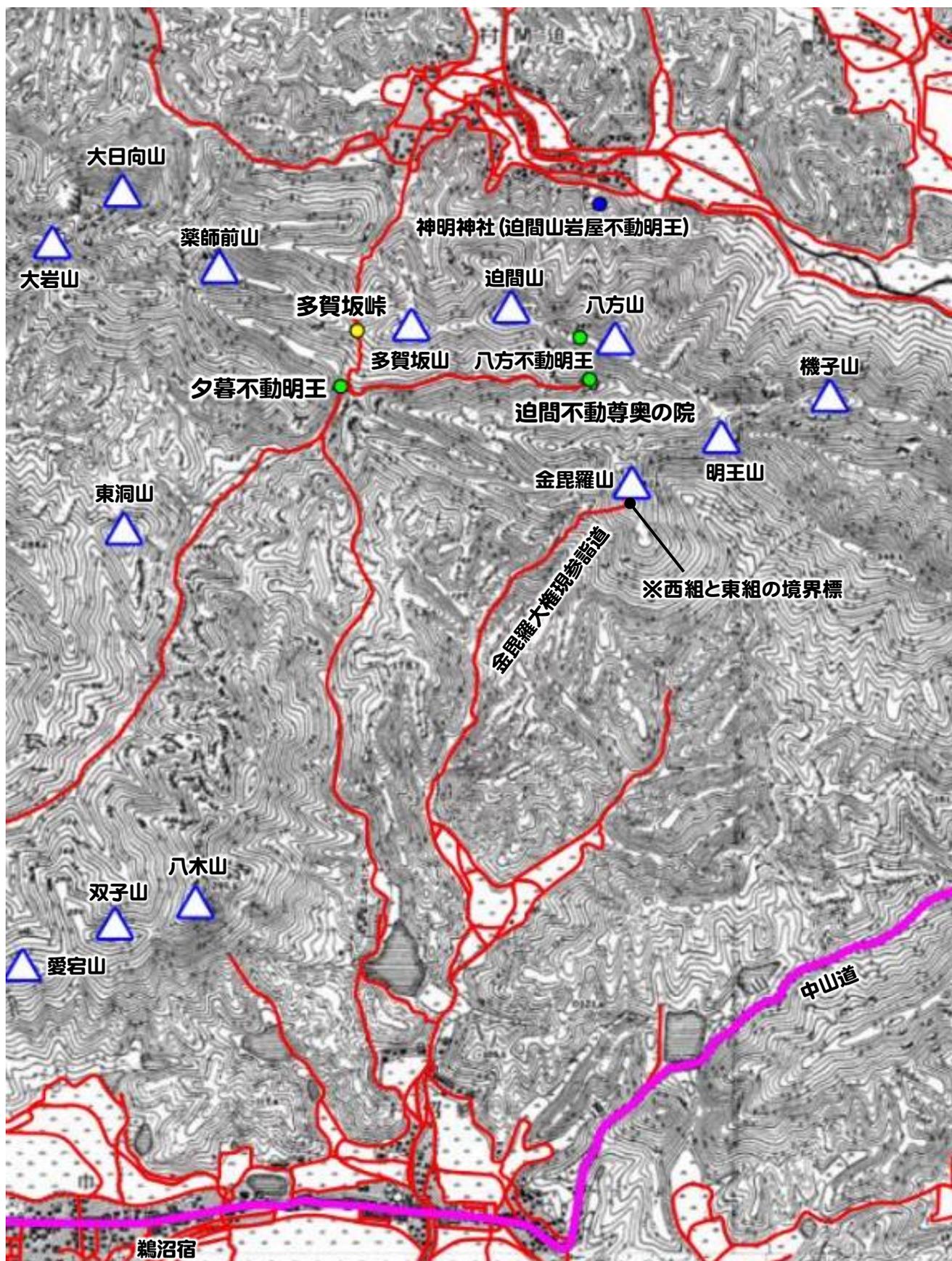


夕暮不動明王大神

八方不動明王から迫間山に向かう手前にも夕暮不動明王大神(右写真)がありあますが、同じ意味で迫間不動尊の北でもあり、迫間城があった頃から稜線上に道があり、八方不動明王の西側でもあります。

【明治後期から大正時代の地図と当時の道及び現在の位置関係地図】

修験道(現在の登山道)はこの地図には記載されていません。



※鶺鴒宿の本陣・問屋・庄屋を務めていた桜井家が西組と東組に分け、夫々に組頭を設け管理していたと思われます。